

# 京都大学人文科学研究所共同研究 最終報告書

## 1. 研究課題

実験性の生態学：人新世における多種共生関係に関する比較研究

Ecologies of Experimentality: A Comparative Approach to Multispecies Coexistence in the Anthropocene

## 2. 研究代表者氏名

モハーチ ゲルゲイ

Mohacsi Gergely

## 3. 研究期間

2020年4月-2023年3月

## 4. 研究目的

近年、新薬の臨床試験や遺伝子組み換え作物の試験栽培が例示するように、科学実験の現場は実験室から社会へと浸透していく傾向が顕著に見られる。この展開の背景には、科学技術への市民参加の拡大や、多種多様なデータ処理技術の急激な進歩など、社会的かつ科学的な要因が挙げられる。このような従来の科学実験が閉鎖された空間と時間から、社会全体へと拡大していくという展開を、「実験性」(experimentality)と呼ぶことができる。本研究では、この「実験性」において人間と動植物との相互作用がどのように再秩序化されるのかを、国内外の人文・社会科学で近年関心が高まる「人新世」(Anthropocene)と日本で展開している「環世界」および共生研究との対話を通して比較検討する。科学技術への期待やイノベーションの状況が共生そのものの存在論的な基盤となることを人文科学の視点から分析研究するために、本研究では目的を二つ設定する。一つ目の目的は、人間と他の生き物との共生関係をめぐる変遷を描き出す事例の比較研究を重ね、「実験性」における共生関係の政治的、科学的、情動的な結び付きを明らかにすることである。二つ目の目的は、人新世の人文科学における水平的な方法論の展開を受け止めて、実験的な多種誌の可能性を提示することである。

From randomized controlled clinical trials of pharmaceutical products to the field testing of genetically modified organisms or smart city experiments, in the past half century the site of scientific testing has expanded from the laboratory to society at large with all its political and ethical implications. These changes have been prompted by the increasing level of lay expertise and public participation in technological innovation, as well as by the rapid progress of data processing and computational infrastructures. We call the wide-ranging consequences of this transformation “experimentality.” How has this public participation in experimentation

reshaped the relationship between humans and other living things? In what sense can technological innovation be thought of as the ontological ground for multispecies togetherness in the Anthropocene? To answer these and other intellectually pressing questions, this project will engage in a comparative discussion with specialists in the environmental humanities in and outside Japan by building on existing theoretical frameworks such as *kansekai* (Umwelt) and *kyōsei* (togetherness). The aim of the project is twofold. First, it explores the political, scientific and affective re-construction of 'multispecies togetherness' in the Anthropocene through specific case studies and comparative analysis. Second, it provides a methodological ground to engage with the lateral move in the humanities by creating an experimental space for the ethnographic study of multispecies coexistence.

## 5. 研究成果の概要

当共同研究は、3年にわたり実施した。初年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、リモート形式での運営となった。6回の共同研究会を通じて、実験性の人文・社会科学に関する先行研究の解釈や発表、討論を中心に研究を進めてきた。後半から、若手研究者なども交えた議論を踏まえて、国際的なネットワーク構築に不可欠な知識を得る活動を試みた。2年度目は、初年の最後の研究会でまとめた6つの研究焦点を3つに絞るための検討を行い、仮の課題組として(1)「多種共生の実験」(2)「生活としての実験」(3)「人新世という実験」を設定し、人文学の方法と現場をつなぐという側面思考の基盤 (lateral ethnography) を活用することにした。最終年度は、各班員は令和3年度までに行った研究焦点の整理を踏まえて、それぞれの分野で「実験性」の事例を探究してきた。さらに、ケンブリッジ大学 (モハーチ) とカリフォルニア大学 (石川)、アムステルダム大学 (鈴木) との連携に取り組んでおり、上記の課題組みを確かめた。「実験性の生態学」と題したリーズのもとで、海外の研究者合計6名を招き、4回の国際ワークショップを開催した。秋以降、本共同研究班の最終成果の公表に向けて、各班員は研究課題を個別に進め、シンポジウムや研究会を通じて国内外の研究者と進捗状況や共同編集の内容について意見交換を行った。

## 6. 共同研究会に関連した主な公表実績

国際シンポジウム

"Experimental Ecologies: Case Studies from Amazonia and Japan"

2022年6月18日, 2.00-5.00pm、京都大学人文科学研究所・セミナー室4

国際シンポジウム

"Ecologies of Experimentality: A Comparative Approach to Multispecies Coexistence in the Anthropocene"

2022年12月6日, 2.00-5.30pm、京都大学人文科学研究所・セミナー室4

#### 国際シンポジウム

"Ecologies of Experimentality: A Comparative Approach to Multispecies Coexistence in the Anthropocene"

2022年12月22日, 1:00-3:30pm、京都大学人文科学研究所・セミナー室4

#### 国際講演会

"Stefan Ecks Lecture on Embodied Value Theory"

2023年2月20日, 4:00-6:00pm、広島大学東千田キャンパス 未来創生センター2階

M204 およびオンライン

#### 7. 研究成果公表計画および今後の展開等

本共同研究班の最終成果の公表に向けて、各班員は研究課題を個別に進め、シンポジウムや研究会を通じて国内外の研究者と進捗状況や研究成果について意見交換を行った。成果を2023年12月7日に開催予定の①人文研アカデミーの「実験性の生態学：人新世における多種共生」と題したシンポジウムで、石井と瀬戸口、モハーチ、フランスから Emilie Letouzey 氏の4人が報告する予定である。さらに、バンコクのチュラーロンコーン大学とケインブリッジ大学などの研究者らと共同企画し、本研究班の成果をまとめた②論文集と査読論文の発表を進めている。